

---

# 仮面ライダー空我 ~ 青空の勇者(ニューヒーロー)・青空の伝説(ニューレジェンド) ~

千藤 光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー空我 〈ニコーヒーロー青空の勇者・ニコーレジェンド青空の伝説〉

### 【Nコード】

N2914W

### 【作者名】

千藤 光

### 【あらすじ】

現実世界とほぼ同じ町、空ヶ丘……この世界では現実世界同様に平和で仮面ライダーが普通に放送されている。そんな町に住んでいる高校生、空野 輝トキは空ヶ丘の青空と仮面ライダーが好きである。ある日、好きな女の子の目の前に謎の怪人が現れた。

「あの子を助きたい？」

その時輝は謎の少女に変身ベルト、アークルを手渡され、輝は仮面ライダー空我として空ヶ丘の青空を守ると決意する。

そしてある時、輝の親友、相葉 宏の目の前に記憶喪失で、ジユモ

クギアに変身できる青年、ミオが現れる。

果たして、怪人の目的とは！？ミオの正体とは！？そして輝はみんなの青空を守ることはできるのか！！！！

（キャラの出演を許可してくださった新島先生、空我と一緒に戦うオリジナルライダーを考えてくれたS君、感謝します！！）

## 1話 勇者復活!! (前書き)

まず、何故こんなのを書くかという点、僕がクウガが好きだからです。

前からずっとクウガの小説を書きたいと思ってました。

ファイズの小説と掛け持ちになりましたが、頑張っていきます!!



うるたえていると後ろから声がした。

「青春してるのね。君。」

そこには一人の少女が立っていた。

金髪のショートヘアにその髪と同じ色のワンピースを着ている。クセ毛なのか一本だけ毛が跳ねている。どっちかという点小柄で、青い目のおかげで外国人と言うのはすぐ分かった。

「あの子を助きたい？」

少女は僕に問いかけてきた。

「当たり前だよ！どうやってたら助けられるんだ！？」

僕の頭はそれだけでいっぱいだった。

僕がこんなところに呼び出したばかりにこんなことになってしまったんだ。

少女は口を開いた…

「カンタンよ。君が仮面ライダーになるの。」

仮面ライダーに？

そんなものはテレビの中の世界にしかないと思っていた………しかしこんな状況では信じざるを得ない。

「君にはこの変身ベルト、アークルを託すわ。」

僕は驚いた！

「アークルってたしか……壊されたんじゃない………」



赤い装甲に黒のボディ、クワガタをモチーフとした角の一本折れている仮面……

仮面ライダー空我！！！！

クウガは狼に向かって走って行く！！

「おらあつだあつはあつ！！」

連続でパンチを喰らわす！

「どりゃあ！！」

さらに上段蹴りを喰らわす！！

金髪の少女が逆側の校舎の屋上から戦いを見ていた。

「2人目のクウガも強いわね。しかし、あの怪物は何なの？」

今クウガが戦っている怪物は前述にあるグロンギではない。ましてやどの仮面ライダーシリーズの怪物でも無いのだ。

「また仕事が増えそうね。今はあの子に任せるか……」



僕はクウガからもとの姿に戻った。

「ソラちゃん！大丈夫！！！」

僕は急いでソラちゃんの下へ走って行った。

「ひつく…グスツ…輝君…怖かったよおおお」  
そう言ってソラちゃんは僕に抱きついてきた。

少しびっくりしたけど、ソラちゃんは本当に怖がっていた。僕が悪い。僕がこんなところに呼び出したから……

「ごめんね、ソラちゃん。僕がこんなところに呼び出したから……怖かっただろ？もうこんな思いはさせないから。僕がずっと守ってあげるから……！！！」

そう言ってソラちゃんをぎゅっと抱きしめた。

僕はソラちゃんを……空ヶ丘を……みんなの青空を守るんだ  
！！

そう心に誓った。

次回の仮面ライダー空我は!!

「あの怪物って……」

「ラミカって呼んで!」

「お前夢でも見ていたんだよ!」

「超変身!!!!」

次回、超変身!水の青龍の力!!

青空を守る為に戦え!!!!

## 1話 勇者復活!! (後書き)

なんかオーソドックスな感じになりましたが後悔はしてません。

僕の永遠の心のヒーロー、クウガを小説に出来てとても楽しいです!

この話を作るにあたり、ラミカ出演の許可を出してくださいました新嶋先生、素敵なキャラにしてみせます、新嶋先生のとある顎門アギトの交錯クロス覚醒ライズのキャラです。こちらの方が面白いので、僕のヘタクソな小説より、こちらの方が千倍面白いので、読んでみてください。

オリジナルライダー? まだまだです。しかしすぐ出します。お楽しみに〜

## 2話 超変身！水の青龍の力！！（前書き）

前回のあらすじ

「止めろおおおおお！！！！！！」

「あなたにはこの変身ベルト、アークルを託すわ。」

ドカアーーーーン

「みんなの青空を守ってみせる！！！！」

## 2話 超変身！水の青龍の力！！

昨日はあの後大変だった。

屋上でいきなり爆発音がしたんだ。騒ぎになってもおかしくない。僕とソラちゃんはあの後警察から事情聴取を受けたのだけれど、怪人が現れて、それを僕がクウガになって倒したと言っても誰も信じてくれなかった。おかげで教室では朝からクラスメイトに質問攻めだよ……

「アキラ！昨日ソラに何したのよ！！」

「何度も言ってるじゃないか！！いきなり狼みたいな怪人が現れて……」

「もっとマシなウソはつけないの！？もう聞き飽きたわよ！どうせ青空がどうのこうのとか言ってるなんかしたんでしょ！！」

「だから、本当に……」

「もういいわよー！！厨二病の相手してるところでちまでそうなっちゃいそうよー！」

そう言ってソラちゃんの親友の女の子は僕から離れた。そして最後に僕にこう言った。

「もう二度とソラには近づかないで！ソラにも厨二病が移っちゃうわよー！」

どうして誰も信じてくれないんだろう……まあ、それもそうだよね。  
こんな話して信じる人はまずいないよね。  
だけど近づかないではひどいよ……

僕は諦めて自分の席に戻った。そして空を見た。

「父さんは信じてくれるよね……」

空ヶ丘の青空は僕に元気をくれる。空ヶ丘の青空はいつも違う表情  
を見せるんだ。僕はその表情を見るのがとても好きなんだ！  
こんなことをみんなに言ってからかな。みんなが僕を変わり者って  
言い始めたのは……

時間は過ぎて行き、放課後、僕は帰路についていた。

僕は昨日あったことについて考えた。

あの怪人のこと、2本目のアーケルのこと、金髪の女の子のこと……

「あ〜き〜らあぁっー！」

そう聞こえた後で、背中に重い衝撃が走った。

「ギャツ！」

「相変わらず輝は鈍いな〜」

「いきなり膝蹴りとかひどいよ……」

彼の名前は相葉 宏、僕の親友だ。

「昨日フられた？」

「いきなりそれ？昨日はそれどころではなかったんだよ。」

「やっぱり昨日のこと本当なんだ。」

「宏君！信じてくれるの！？」

「昨日ソラちゃんに嫌がらせをして嫌われたこと！」

「宏君も！？？だからほんっつとつとつに昨日は……」

「はいはいわかった信じるよ。」

「なんだよその言い方！」

そんなことを言いながら帰っていると後ろから誰かに呼び止められた。

「ちょっと君達いいかしら？」

そこには昨日僕にアークルを託したあの金髪の女の子がいた。

「ちょっとお前なんでこんな金髪美少女と知り合いなの!？」

「だから言ったことは本当だろ?この子が僕にアークルを渡したんだよ。」

「どうせ出任せのウソだろ?大体何だよアークルって?」

「だからこの子は僕にクウガの変身ベルトのアークルを手渡した……ごめん、誰だっけ？」

昨日僕は戦いに夢中であの子の名前を聞き忘れていた……

「私はラミカ・リュミネート、ラミカって読んで!」

そう言ってラミカは微笑んだ。

「オレは相葉宏!野草とか草木についてはオレに任せてください!」

「ちょっと宏君!君は関係ないじゃん!」

「え〜い〜じゃん!」

その様子を見てラミカはクスリと笑った。

「さあ、君の自己紹介はまだだったわね。」

ふう。やっと自己紹介できる。

「僕の名前は空野輝。僕は仮面ライダーには詳しいかな〜」

僕がそういった直後、ラミカちゃんの顔はこわばった。

「仮面ライダーを知ってるの？」

ラミカちゃんは僕に質問してきた。

「知ってるも何も仮面ライダーって超有名だよ！けどどうして？」

「まずいことになったわねえ。どこかゆっくり話のできるところはある？」

ラミカちゃんは少し焦っている様子だった。

「だったら僕の家に来るといいよー！」

ラミカちゃんと僕は家まで行くことにした。宏君はいると面倒なので、先に返した。

しげらくじり……………

僕達は家についた。

「家って……………これ？……………」

「そうだよ。」

ラミカちゃんは驚いていた。

それもそのはず、そこは喫茶店だったからだ。

僕は姉と一緒にとある事情で喫茶店、『マイペンライ』に居候している。

僕達はマイペンライに入って行った。

「ただいま!!おやっさん!!!!」

おやっさんはこの店長である。顔は少々老けているが、40代には見えない体をしている。

「おかえり!輝君。その子は?」

「昨日言った女の子。」

「ラミカ・リユミネートと言います。」

そういつてラミカちゃんはおやつさんに礼をした。

「おやつさん！しろくま2つ！」

とりあえずそれを注文して、テーブルに座った。

「まず、何か聞きたいことはあるかしら。」

僕は一番の疑問をぶつけて見た。

「君は何なの？」

「まあ、詳しくは言えないけど、異世界って信じる？」

ラミカちゃんはいきなり妙なことを言ってきたが、だいたい察しはついている。

「まさか、ディケイドみたいに世界を旅しているとか！？」

「まあ、そんな感じね。仮面ライダーを知っているとすると話しやすいわね。他に聞きたいことは？」

「なんでアークルが二本もあるの？」

「あなたは昔、クウガは2人いたっていうことを知っているかしら。」

「マジで？本当に？」

「ハイしろくまお待ち！！！」

かき氷のシロップの代わりに練乳をかけた白いかき氷、南国名物しろくまが運ばれてきた。

「クウガが古代の戦士だっというのは知っているわよね？」

「うん」

「古代のクウガは2人でグロンギと戦っていて、戦っている最中に一人が戦死したの。そして、その死体で作ったものがゴウラムなの。」

「へ〜」

知らなかった……………クウガの設定も考古学見たいだ。

「するとこのアークルは……………」

僕はラミカちゃんに聞いてみる。

「そう！その戦死したクウガのものよ。」

しかしまた新たな疑問が生まれた。

「どうしてそんなもっているの。」

「仲間に託されたの。新しい変身者が現れるまで持ってるって」

そこまで言ったとき、放送が流れた。

ぴーんぽーんぽーんぽーん

空ヶ丘3丁目で謎の怪人が暴れています。市民の皆さんは外出を控えるようにしてください。繰り返します。空ヶ丘3丁目……

ここから近い！

僕はラミカちゃんと一緒に現場へと向かった。

そこにはトラの怪人がいた。腕には大きなカギ爪がついてみた。

「そこまでだ!!」

輝はトラの怪人の前に立ちふさがる!

輝は腹部に両手を構える。するとクウガへの変身ベルト、アークルが出現する。

輝は右手を斜め左に、左手をアークルの上に乗せて横に動かす。そして叫ぶ

「変身!!!!」

そう言つて輝は両手を重ね合わせ、左側のスイッチを押す。

すると輝は古代の戦士、黒いボディに赤の装甲の仮面ライダー空我に変身した!

クウガはトラに攻撃を仕掛ける。しかし、カギ爪で受け止められ、押し返される。トラはものすごいスピードでクウガを攻撃する。早過ぎてクウガは対応しきれない。一方的にクウガは攻められている。

「グルルルルル………ガアッ!グアア!」

「ガッ！ウワァッ！」

こんなとき、どうすれば……………？

その時、ふと転がっていたほうきがクウガの目に止まった。

よし！

クウガは攻撃をよけ、ほうきを拾い、再び変身ポーズをとる。

「超変身！！！」

するとクウガの装甲と複眼が青くなり、仮面ライダー空我、水青龍<sup>ドラゴンフォーム</sup>の姿へと姿を変えた！

「グワアアアアアア！！！」

トラが襲いかかってくるが、最小限の力で避けて、ほうきを変化させたドラゴンロッドで間合いを取る。また襲いかかってくるトラの攻撃を避けてドラゴンロッドで叩きつける。さらにトラの体を連続

で突きまくる！！！！

「ハアアアアアアッ！」

ロッドに力を溜める。そして最後の一撃を叩き込む！！！！！！

「うう……呪い……せつかく集めた呪いがあああああつ。ギャアアアアアアアッ」

断末魔と共にトラの怪人は爆発した。

呪い？

クウガの頭にまた一つ疑問が残った……………

僕は変身を解いた。

「あの怪人って……………何だろっ……………」

ラミカのケータイになる。ラミカのケータイは、ダークグレーのボディに黄色いラインのはいった特徴的なケータイである。

「もしもし？」

「チャーツス！」

相手はなんかしょっぱい敬語を使っている。

「あなただったのね。ススム」

「ラミカさん！バカンスはどうですか？」

「それが……………」

ラミカはこれまでのことを話した

「ヤバいことに巻き込まれたっすね…しばらくはそこに滞在して詳しく調査して欲しいっす。」

「わかったわ。」

そう言ってラミカはケータイを閉じた。

次回の仮面ライダー空我は！

グギョルルルルルルルル

「記憶喪失？」

「だったらここに住もうよ!」

「オレも……仮面ライダーに……」

次回、第2の仮面ライダー、樹木

みんなの青空を守るために戦え!!!

## 2話 超変身！水の青龍の力！！（後書き）

終わった……眠い……

今日体育祭でフォーゼ見れなかった。

ので体育祭での報告

1・徒競走で1位になった。

2青団が弱すぎて紅組に優勝をかつさらわれる。

閉会式で校長がと放送部がオンドウルしまくった

日常のoppが流れた。

文章がひどいのは、すごく眠いからです。（このあと加筆修正しました。）

### 3話 第2の仮面ライダー、樹木（前書き）

前回のあらすじ

「もう二度とソラには近づかないで！ソラにも厨二病が移っちゃっわよー！！」

「古代にはクウガが2人いたって知ってる？」

「超変身ー！！」

「とりあえずそこで調査してほしいっす。」

### 3話 第2の仮面ライダー、樹木

トラの怪人を倒した後をよく見渡してみると、周りは滅茶苦茶だった……

「ひどい……」

家のガラスは割れていて、停めてあった車はひっくり返っていた。

あいつら絶対許せない……

そう思っていると聞き慣れた声があった

「ああああああ輝！？こっ…コレ何だよ！？？」

「宏君！？大丈夫だった！？」

「おおおおお前の言ったこと本当だったの？」

宏君はだいぶ怯えていた。

「言ったでしょ！僕は仮面ライダーになったって！自分で言うのも何だけど僕は厨二病じゃないんだからね！」

「あれって確か、アギトって言ったっけ……」

「クウガだよ!!!」

良かった。大丈夫みたいだ。他に犠牲者もないようだし帰って食べかけのしろくまを食べるか。

「そういえばラミカちゃんどこだ？」

戦っている最中にいなくなったみたいだ。

「あついたいた！輝！」

すると向こうからラミカちゃんが走って来た。

「あつラミカちゃん！どこ行ってたの？」

「ちよつと電話がかかってきて……」

「ああ全然大丈夫ですよ！」

「何で宏君が答えるのさ！」

とかツッコミを入れいると、ラミカちゃんが口を開いた。

「あ……？」

「何？」

「ここらへんに宿とかないかしら？」

「へっ？何で？」

「さっきの電話で仲間からここに滞在してあの怪人を調査してほしいって言われて……」

ん〜。そんなこと言われてもここに宿とかないし……

そっだ！

「家にくればいいよ！」

「へっ？」

「マイペンライって喫茶店だけど、下宿もやってるし、僕もクウガとして戦っているからちよっどいいでしょ。」

「それもそっね。じゃあお願いしようかしら！」

「輝お前ソラちゃんという人がいながらあああ！！！！！」

そっ言っつて宏君が首を絞めてきた。

「別にそっいう意味じゃ……」

そこは薄暗かった。

カツカツカツカツ

白衣を着た女が歩いてくる。

「T333もやられました。」

声の先にはマントを着ていて、フードをかなり深く被った男が座っていた。

「別にいい。あれは捨て駒だ……。クウガか……。やはりあいつらは邪魔をしてきたか……。」

そう言ってマント男は立ち上がり、ネジマキをオリの大鷲にネジマ

キを差し込んだ。

「行って来い……H52………」

ネジマキを差し込まれた大鷲はみるみる姿を変えていった……

宏は一人で歩いていた。

「チキショー！あいつハーレムでもしたいのか！？」

訳の分からない独り言を言っていると、あることに気がついた。

あれ？人が倒れているし………

グギョルルルルルル

10mも離れていたのに腹の音が聞こえて来た。

「あの人、ソートーヤバいでしょ………」

宏は倒れている男に近づいた。男は二十歳くらいだろうか…まだ若い顔をしていた。

「大丈夫ですか？」

声をかけると男はこっちを見てこう言った。

「腹減った〜〜お願い何でもいいから何か食わせて〜〜!!」

宏は困った。今はお金持っていないし、食料もない。どうしようか迷っている、あることに気づいた。

ここ、河川敷の土手じゃん！



2人がやいやいやっている時、どこからか大鷲の怪人が宏の前に飛来してきた。

バサツバサツ

「お前の呪いを奪わせてもらう。」

「ちよっ、今それどころじゃ……」

宏が後ずさりすると、男が手を叩いていった。

「あっ思い出した。オレは……」

男も場の変化に気づいたみたいだった。

男はおもむろに空中前転をした。すると男の体は光に包まれ、ベルトへと姿を変えた！

宏はベルトをつかんだ。するとベルトから声が聞こえた。

「オイ！オレ一つ思い出した！！オレは変身ベルトのジユモクギアに変身できるんだった！！」

「はあ！？？」

宏は驚いていた。

「変身ベルトに変身ってなんなんだよ！！」

大鷲は今にも襲ってきそうだった。

「お前が仮面ライダー樹木になるんだよ!!」

ジユモクギアは叫ぶ!

「オレが……仮面ライダーに……」

「そうだ!オレを装着して変身って叫べ!」

「ああもうどうにでもなれ!!!!」

そう言っつてベルトを装着して、左手を上へ上げ、右手でバックルのレバーをつかむ。

「変身!!!!」

そう叫び、レバーを右から左に動かす。すると体が木の葉に包まれ、緑のボディにクウガとは対照的に機械的な装甲、カブトムシをモチーフにした角張った仮面の仮面ライダー樹木へと姿を変えた!!!!

「何!?!」

大鷲は驚いている。

「おお。」

樹木は感嘆の声をあげる。

「来るぞ！」

大鷲はさっきのトラと同じくらい鋭い爪で襲って来る。

ガイン！

それを左腕で受け止め、はじき返す。

「らああああっ！！！」

重いパンチを大鷲に喰らわす！

「でいつ！ダアツ！おりゃあっ！」

さらにパンチを喰らわす！

「オイ、ベルトの右側のこれ使え！」

そう言われ、右側を見ると、何やらゼンマイがついている。

「ベルトの真ん中にそれを差し込んで武器を呼び出せ！」

樹木は『リーフブレード』と刻まれたゼンマイを取り出し、ベルトの真ん中につけて回してみる。

リーフブレード……！！



気合い玉を大鷲にお見舞いする。

「ぎゃああああああああつ!!」

大鷲は爆発した。

樹木はレバーを戻して変身を解いた。

男も変身を解く。

「悪かったな。少年……あの草つまかったぜ!」

そう言って男は帰ろうとした。

「待てよ!!!」

男は宏に呼び止められた。

「これからどうすんだよ……」

「さあな。」

男はそっけなく答える。

「オレン家にこい。」

宏は力強く言った。宏は無意識に口に出していた。

「お前といっしょならまた怪人が攻めてきても大丈夫だろ。オレは相葉宏、よろしくな！」

そう言って宏はてを差し出した。

男と宏は握手をした。

「オレは……名前分らないんだっただ！」

男は笑った。

宏がふと男の着ているジャケットに目をやると、何やら書いていた。

「M……I……O……。よし！お前の名前はミオだ！」

「ミオか！いい名前じゃねえか！！」

笑いながら2人は河川敷の道を歩いていった……

ここはマイペンライ！

おやっさん曰わく、マイペンライとはタイ語で「大丈夫」というみたいだ。

今、僕たちは店内でマイペンライ特製の納豆カレーを食べている。

僕たちというのは、僕とおやっさんとラミカちゃんとお姉ちゃん、美咲の4人だ。

「なんか突然すみません。」

ラミカちゃんがニンジンを僕の皿に移しながら言う。

「大丈夫だよ！部屋はいくつも空いているしね！」

そう言ったおやっさんは納豆のかかっているカレーにさらにソースをかけている。

「昨日の話本当だったんだ。」

お姉ちゃんがカレーを頬張りながら言う。

「やっぱり信じてなかったんだ……」

今のところ信じてくれているのはおやっさんと宏君とお姉ちゃんだけである。

「はあ〜」

ため息をつきながらニンジンまみれになったカレーを口に運んだ。

ニンジン美味しいのに……

そう思いながらラミカちゃんの顔を見ると、なんか寂しそうだった。

「どうしたの？」

「ううん！ただ昔を思い出していただけだから。」

そう言ってニンジンのなくなったカレーを口に入れた。

まあいいや。よし！明日もがんばるぞ！！

そう思い、僕は納豆ニンジンカレーをかきこんだ。

次回の仮面ライダー空我は！

「輝君……なんか……ごめん。」

「空ヶ丘署の飯島です。」

「ツノ一本折れてるの!？」

「これだ！」

次回、攻めのレイニー！守りのタイタン！！

青空を守るために戦え！！

### 3話 第2の仮面ライダー、樹木（後書き）

まず、新嶋先生！ラミカの設定を少しいじってごめんなさい！こうすれば可愛くなると独断で決めてしまいました！

さて、仮面ライダー樹木こそ、あのS君が考えたオリジナルライダーです。

しかし、人がベルトに変身以外は設定をかなりいじりました。本来ミオは20代ではなく、50代の忠 尾という男で、変身も、ゼンマイを回した後、ワインダーを引いて、エンジンをかけて、変身するというので、（もちろん環境に悪い。）極めつけは必殺技がギャリック砲というかなりむちゃくちゃな設定でした。

これでは正義のヒーロー、仮面ライダーではないので変えました。S君文句があるなら感想による~~~~（^ー^）ノでは。



4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！1/2

(ああ〜〜どうしよう……………)

輝はすごく悩んでいた。

輝は初めてクウガに変身したことを思い出していた。

『ソラちゃん。怖かっただろ。』

(いくらノリといっても付き合ってもいない女の子を抱きしめるのはヤバかったかな〜。絶対ソラちゃんに嫌われたよ〜)

「嗚呼……………」

今更である(笑)

「うあ〜〜〜きい〜〜〜らああああッ!〜!」

いきなり宏が席に座っている輝に強引にドロップキックを打ち込む。

「グアハヘア」

ガツシャーン!!

輝、机、椅子、鞆が真横に吹っ飛んでいった。

「ぐおおおお。いちいち宏君は登場がバイオレンスなんだよ……………」

苦悶の表情を浮かべながら上に乗った机をどかしながらふらふらと立ち上がる。

「何？今度はどうした……………」

輝は宏を見て絶句した。

「……………」

宏がドロップキックの着地を頭からしてしまい、只今宏は頭を抑え、絶賛悶絶中であった。

「できないならやるなよ!?!?!?!」

（……………）

まず宏が口を開いた。

「実はな、オレな、何になったと思う？」

「宏君？日本語になってないよ。」

宏のアホさに輝はただただ呆れるだけである。

「んで？何になったの？」

また妙なことをいうんだろ、と心の中で呟きながら、宏の返信を待つ。

「実は、オレ、ついに……」

「うんうん。」

輝は次の言葉を聞くまでは、宏をただのアホな親友としか見ていなかった。

「仮面ライダーになったんだ!!」

輝の目は輝いた。

「えっ！マジで!!!!」

宏は樹木に変身した時のことをこと細かに説明した。

「すっげー！変身ベルトに変身ってカッコイ〜〜！」

「エへへ。もっと誉めて〜ん」

まあ、輝が誉めているのは、宏ではなく、三才なのであるが……

「ま〜たあの二人おかしな会話してる。」

そう言ったのは、輝を厨二病呼ばわりしたあのブスである。（自分の顔も解らずに人のことやたらめったらいうやつたまにいるよね〜）

「ねえ、ソラ。なんであいつのことが好きなの？」

ブスとは別の少女がソラに話しかける。

「あの時……私のこと……守ってくれてって言ったから……。」

顔を赤らめながら、その時を思い出すかのように、ゆっくりと茜  
ソラは言葉を紡ぐ。

「あの時って？」

「輝君が初めて仮面ライダーになった時…かな？」

少し恥ずかしそうに微笑む。

「ソラ！まだそんなこと言ってるの！？」

ブスが机を叩きながらソラに訴えかける。

「なんで信じてくれないの？」

ソラは、輝同様に困っていた。あの時の話をしても、一向に誰も信じてくれないのである。

ここは、現実。何も見ていない人はそんなことを言われても、テレビ中のことが現実にかかるはずはないと相手にしてくれないのが、正しい対応である。しかし、ソラも輝も宏もしっかりこの目で見てるのである。

「放送だって流れたじゃん！」

これなら、みんな聞いているから知っているはず！そう思い提示した言葉だったが、一蹴された。

「どーせ訓練かなんかでしょ。」

「何よ！三丁目で怪人が暴れてるって！」

アッハッハッハッハッハ

二人は笑っていた。

「どうして……危ないのに……」

ソラは初めて、彼女らは本当に友達なのかと疑問に思った。

カツカツカツカツカツカツカツ

白衣を着た女が薄暗い廊下を歩いている。  
女は実験室のような場所へと入って行く。

「P602、F37、サンプルは準備できました。」

白衣の女は、ネジまきの入ったトレイを、黒いフードを顔が隠れる  
までかぶった男に渡した。

「実験は良くも悪くも、予想の範囲内だ。ただ……」

「ただ？」

「仮面ライダーの出現以外は……」

男はトレイを受け取り、まるで動物園かというくらいの動物の檻に  
歩みよる。

「空我……樹木……目障りだ……」

男は、ゴリラとトカゲにそれぞれネジまきを差し込んだ……

}} A f t a r S c h o o l }}

輝と宏はマイペンライへと入った。どこからつれて来たのか、ミオも一緒だ。

「ただいま〜」

「こんにちは〜っす」

「アニヨハセヨ」

(宏君、記憶喪失をいいことに妙なことを教えているな?)

きっとこれは韓流ブームに悪ノリしてしまったせいだろうと輝は思い、3人はマイペンライへと入ってゆく。

するとそこには、おやつさん、輝の姉、黄色いセーラー服を着たラミカの他に、見慣れない人がいた。その人は長いジャケットをスーツの上から羽織っていた。

「おお、輝君、宏君、お帰り！」

おやつさんは2人に2人に手を振ってあいさつした。

「その人は？」

輝が問いかけると、ジャケットの男はこっちを振り向き、スーツのポケットから、手帳を取り出し、言った。

「初めまして。空ヶ丘署飯島と言います。」

飯島は警察手帳を取り出し、頭を下げた。

(刑事さんが何の用だ?)

不思議に思い、ふと横を見た。

すると宏がすごい顔で青ざめていた。

(えっ?はっ?どうしたの???)

すると宏が口を開いた。

「す……す……す……す……すみませんでしたああああっ……!」



#### 4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！1/2（後書き）

まず、更新遅れてすみませんでした！！！！

9月半ばにスランプに陥り、スランプも脱したころ、ファイズ進め初めて、そろそろ空我と思ったら、魔のテスト期間に入ってしまったというわけです。

正直、ここまで溜めるつもりは全くありませんでした。

次に、ラミカの衣装ですが、黄色いワンピースから、黄色いセーラー服に変えようと思います。理由は、黄色いワンピースというのが、いまいちイメージしづらいからです。そして、異世界から来た人だから、少し変化が欲しいなあ〜と思ったからです。新嶋先生、たびたびすみません！

最後に、この小説を書いている理由です。

1話で、「クウガが好きだから」と書きましたが、それより重要な理由があります。それは、「もし現実世界にいきなり怪人が現れて、自分が仮面ライダーになつたら」という話を、この小説サイトにくる前から考えてたからです。けど、輝とオレは性格全く真逆です。どっちかというと、ファイズNexの沢村巧の方が性格近いです（笑）

空ヶ丘が現実の世界ということを再認識させるための回でした。

次回はついにバトルです！期待せずに待っていてください。すぐ書けると思います。

では（＾ー＾）ノ

4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！2/2（前書き）

続きぐじゅぞ

#### 4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！2/2

「ちよっ、宏君！？何やったの！！？」

宏を起こしながら輝は宏に問いかけた。

「えっ？あ。いやあ特に何もしてないよ。」

「『『『『何じゃそりゃ！』『』『』』」

5人がずっこけたのは言うまでもない。

「いや〜、条件反射ってやつ？アツハツハツハツ」

（アツハツハツハツハ〜じゃないよ。まったく。）

「ええと、話を進めていいかな？」

輝が呆れていると、飯島が一步前に歩みよってきた。

「実は、ここ最近未確認生命体が暴れているという通報が何件かきているので、聞き込みをしていたところなのです」

すると輝は飯島に気になることを聞いてみた。

「あの事信じているんですか？」

飯島はポケットから少し大きめの茶封筒を取り出しながら続けた。

「証拠写真が沢山あるのね。」

そう言っつて飯島は茶封筒から何枚か写真を取り出した。

「あっ！これオレだ！」

そう言っつて宏は樹木と大鷲が戦っている写真を手にとり、ニヤニヤしながら眺めていた。

「あの〜、オレというのは……」

輝と宏は自分が仮面ライダーであることを詳しく話した。

「なるほど……君達が……」

宏は満足げにふんぞり返っていたが、輝だけが写真を手に、震えていた。

「こんなの……クウガじゃないよ……角が一本折れてるなんて……」

「当たり前よ。一度死んでいるのよ！歴戦の勇士と思えばいいの！」

ラミカが写真を覗き込みながら言った。

「私たち空ヶ丘署は、未確認生命体特別対策本部を設置しているの  
で、もしかた何かあったら連絡ください。では私はこれで。」

そう言つて飯島は名刺をカウンターに置いて帰つていった。

「警察かあ〜」

（何かクウガ本編と同じ感じになつてきたなあ〜）

そう思い輝が鞆を下ろした時、おやっさんが笑顔で輝に近寄つてき  
た。

「悪いけど、買い出ししてきた。」

輝「何で2人もついてくるのさ…」

宏「パトロールも兼ねてだよ！」

ミオ「社会勉強もしたいしね」

まあ、いいか。

輝がそんなことを思っていると、どこからか、例の未確認生命体が3人に襲いかかってきた。

「「「ワアアッ！」「」」

一方は、鎧をつけたゴリラ、もう一方は炎を身に纏ったオオトカゲ。

「いくぞ！ミオ！」

「おお！」

ミオはジュモクドライバーに変身し、宏はそれを腰に装着する。

輝は変身ベルト、アークルを出現させ、変身ポーズをとる。

「「変身！……！」」

輝はアークルの左側で手を重ね、スイッチを押すようにして、クウ

ガに変身する。

宏はベルトのレバーを180度動かす。宏の身体は木の葉に包まれ、樹木へと変身する。

「「シャアっ」」

クウガは鎧ゴリラに、樹木はオオトカゲへと攻撃をしかける。

「ウワアッ」

クウガはいきなりゴリラに吹っ飛ばされた。

クウガは近くに鉄パイプが落ちているのに気がついた。

「これなら防御力を強化して、吹っ飛ばされないはず！」

クウガは鉄パイプを拾い上げ、再び変身ポーズをとる。

「超変身！」

クウガは赤のマイティフォームから、騎士の鎧を彷彿とさせる装甲のタイタンフォームへとフォームチェンジした。

一方樹木は……

「ウワアッ！絶対不利だって！！！」

樹木は炎攻撃をただ避けるばかりであった。

「フォームチェンジだ！」

ジユモクドライバーが叫ぶ。

「左側のゼンマイ！」

「ん〜と」

これだ！

樹木は雨と書かれたゼンマイをバツクルに差し込む。

>レイニーフォーム！<

電子音と共に、緑のボディから、水色のボディのレイニーフォームへとチェンジした。

クウガ

「タアッ！ハアッ！ドリヤア！」

クウガはタイタンソードで鎧ゴリラを切りつけていく。

「ガアアアッ」

鎧ゴリラのパンチが決まる！しかし、装甲の厚いタイタンフォームの前ではそんなものは無意味なのである！

「ハアッ！ダアッ！オオリヤッ！」

ギインギインギイン

鎧ゴリラはどんどん斬りつけられていく。

そろそろ

「ハアアアアアッ」

クウガがタイタンソードにパワーを溜める。

「リヤアアアアアアアッ！！！！！」

クウガはタイタンソードを振りかざし、鎧ゴリラをまっぴたつにたたっ切った！

「ギャアアアアア！」

鎧ゴリラは爆発した。

樹木

バシユン！バシユン！バシユン！

樹木はレイニーフォームの武器、レインシャワーガンで水の弾丸を炎を纏ったオオトカゲに打ち込んでいる。

「グエエエエエエ！」

炎に水はかなり相性がいい。

「よし！トドメだ！ガンにゼンマイを差し込め！」

樹木は右側から、チャージショットと書かれたゼンマイをシャワーガンに差し込む。

>レイニーパワーチャージ！<

水の力を最大限まで溜め込み、チャージショットをオオトカゲに打ち込む。

「ギヤアアアア！」

ドカーン！

オオトカゲも爆発した。

2人は変身を解いた。

「何だこれ？」

輝はオオトカゲが爆発したあとに、ゼンマイが落ちているのを見つけて、拾い上げた。

「Error？」

次回の仮面ライダー空我は！

あなたも乗りたい？

ツチャース！

今、僕は大空を……

ドオツドドドドドドドドロボーっ！！

次回！大空へ羽ばたくマシン！

青空を守るために、戦え！！

#### 4話 攻めのレイニー！守りのタイタン！2/2（後書き）

次回予告通りに行かないことがよくあるので、注意して下さい。そして、またしばらくお休みします。次は実力テストがあります。ス  
イマセン！

感想&amp;mp・お気に入り登録お願いします！では（＾|＾）ノ

## 5話 大空へ羽ばたくマシン！（前書き）

前回のあらすじ

「実は俺！仮面ライダーになつたんだ！」

「空ヶ丘署の飯島です。」

「歴戦の勇士と思えばいいのー！」

「レイニーフォーム！」

「error?」

## 5話 大空へ羽ばたくマシン!

輝は炎オオトカゲが爆発した所から、一本のネジ巻きを拾い上げた。

「Error?なんだこれ……………」

輝は不思議そうにネジ巻きを見ていた。

「そういえばお前の方は?」

宏は鎧ゴリラが爆発した所に行ってみた。

しかしそこにあつたネジ巻きはクウガタイタンフォームの必殺技で真っ二つになっていた。

「バカアアア!少しは考えろ!」

宏が輝に跳び蹴りを喰らわす。

「ギャツ!」

輝は衝撃でネジ巻きを取り落とす。

「だって知らないんだもん!」

そう言ってネジ巻きを拾い上げようとする……………

「あれっ!?!」

なんとネジ巻きがみるみる消滅して行って、遂には消えてしまったのだ。

「どういうことだ？……………」

二人は驚きを隠せない。

「とりあえずこれだけでも飯島さんのとこ持っていくか。」

宏はそう言っつて真つ二つになったネジ巻きをポケットに入れ歩き出した

「戻ってきました。」

白衣の女の手にはさっきのネジ巻きがあった。

「まだまだ駒は増やせるな……………」

黒マントの男は不敵に笑ってみせる。

「樹木の行動は想定内だが……………やっぱりクウガは邪魔だ……………早めに排除せねば……………」

そう言って別のネジ巻きを手でもてあそんでいた。

次の日

輝はグラウンドにいた。  
それは何故かというと

（よし！飛ぶぞー！！）  
「行きますー！」

輝は一声叫び、走り高跳びのバーへと走っていった。

輝はバーの手前で片足を踏ん張る！

（よし！これで大空を飛ぶように……）

イメージはしたが上手く行かず……

「ウギャッー！」

輝は背中をモロにバーにぶつけた。

「いって〜……ってうわあああ！！」

そして輝が失敗した拍子に支えの支柱も輝の元へ倒れてくる！

しかしそれは練習をすべて見てた宏によって防がれた。

「ったく。何でまた陸上部なんか……」

そう、輝は何故かいきなり陸上部に入ったのだ。

「体鍛えようかな〜って思ってた……」

輝は苦笑を浮かべながら言う。

「だったらボクシング部があつたじゃん！」

「いや、そこにもいったんだよ！」

~~~~~

ボクシング部

部長「どうしてここに入ろうと思った。」

輝「強くなりたいからです！」

部長「ボクシング部をなめるなああああつ……！！！」

そう言われ輝はボクシング部の練習場から放り出された（物理的に）

~~~~~

「なるほどな。」

宏は高跳びのマットに座って腕を組み、うんうんと頷いてみせる。

「じゃあ柔道部は!？」

隣に座った輝の方を向いて聞く。

「いったけどさ……」

~~~~~

柔道部

どっかの高校の柔道部「たのも〜」

うちの柔道部「なんじゃコラア!」

どっかの高校の柔道部「先輩の仇打ちじゃあああああ!」

部長「上等じゃあああああつ! やれええええええ!」

全柔道部全員「~~~~~うおおおおおおおおお

おおおおおおお!」~~~~~

覗いてた輝「うわああ……………」

~~~~~

「さすがバカ柔道部」

宏は溜め息をつきながら言う。

「宏君。」

輝は宏を睨んだ。

「ん？なんだ？」

「とぼけないでよ！もうあきらめてよ！」

「今からでも遅くはない！さあ！」

~~~~~

園芸部

宏「いいから入れよ！」

輝「体鍛えるの関係ないじゃん！」

宏「プランター運び手伝えば筋肉つくぜ！さあ一緒に……………ってどこ行った輝あああああっ！」

~~~~~

「宏君。もう陸上部入ったから無理。」

宏はその場に崩れ落ちた。

そんなこんなで部活も終わり、2人はマイペンライへと歩いていた。

「こんな時に長崎カステラとかおやつさん出さないよね。」

輝は喉がカラカラなのである。

「カレーソーダとか出されたらおしまいだな。」

宏は笑いながら石を蹴っ飛ばす。

ブ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ  
ロ

その時、後ろからエンジン音が近づいてきた。

2人が振り向くと……

「ラミカちゃん！」

ラミカが仮面ライダーカイザの専用マシン、サイドバツシャーに乗ってこっちに向かってきていた。

「あら！宏君！久しぶりね！」

ラミカがサイドバツシャーを2人の前で止めて、ヘルメットを脱いだ。

セーラー服で少女がバイクに乗っているというのはなんとも不釣り合いな光景だったが不思議と自然に見えた。

「ラミカちゃん！かつこいいよ！」

宏は目を輝かせながらラミカを見上げる。

「これサイドバツシャーじゃん！」

輝は目を見開きサイドバツシャーを眺めていた。

「あなたもバイクに乗りたい？」

突然ラミカが話しかけてきた。

「乗りたい！！！」

2人は元気よく返事をした。

「よし！じゃあついてきて！」

そう言ってラミカが指を鳴らすと、どこからか灰色のオーロラが現れて、ラミカと輝とサイドバツシャーを包み込んだ。

宏を覗いて……………

「……………ナンデダヨー————っ」

輝達が飛ばされたのは、自動車教習所のようなところだった。

「……は？」

輝は初めて世界を飛び越えたこともあって少しそわそわしている。

「ラミカさーん！」

後ろで声がしたので振り返って見た。

「マモルー！連れてきたよー！」

振り向いた先には輝と同じかそれより下くらいの少年がいた。

「チャーツス！」

なんかしょっぱい敬語を使っている。

とりあえず2人はマモルと呼ばれた少年のところまで近づいた。

「紹介するね！こっちは空野 輝。こっちは大地 マモル。」

「よろしく」

「よろしくっす」

2人はとりあえず握手した。

「マモルは機械いじりとかが得意なの。だからあなたのバイク作ってもらったのよ。」

「へえ〜。すっげ〜〜！」

輝は尊敬の眼差しをマモルに向ける。

「じゃあ早速輝さんのバイクを紹介しますね！」

そう言つてマモルは何かにかけられた布を取る。

輝は目を見開き驚いた。

「トライチェイサーじゃん！」

チツチツとマモルは指を横に振りながら言う。

「まだまだ甘いつすね〜。ベースはトライチェイサーっすけど、ちよつと違うんっすよね〜」

確かに、トライチェイサーの赤い部分が空色になっていて後ろに何やらちつさめのボックスがついている。

「完全に輝さんのオリジナル機体、トライチェイサーならぬ、スカイチェイサーっす！！」

「すっげ〜！かっこいい〜！！」

輝は子供のようにはしゃいでいる。

「ゴウラムとの合体にも対応してるっすよー！」

輝の頭に？が浮かんだ。

「ゴウラムって僕じゃ……」

マモルはラミカと一瞬目配せしてから言った。

「まあ、その辺は後々っす！」

それを聞いて不思議に思ったが、問い直すことはしなかった。

「じゃあマモル君！バイクありがとう！」

そう言ってスカイチエイサーを押し歩いて歩く。

「じゃあマモル、今度もよろしく！」

ラミカが指を鳴らして次元の壁を出す。

「さよならーっす！」

そう言って2人はかえって言った。

輝が元の世界に戻ってくると、いきなり怪物に襲われた。

「「うわっ！」「

そこには体にモーターのついたチーターが立っていた！

ビュン！

すごい速さでチーターは逃げ出した。

「あつ待て！」

そう言つて輝はスカイチェイサーに跨り、チーターを追いかけた。

ヴオオオオオオオオオオン！

スカイチェイサーは速いが、なかなか追いつけない。

（300km以上ともう無理だろ〜）

輝が諦めかけたその時！

ドン！

横から緑のバイクがチーターを引きとばした！

「ふう〜間に合った〜」

そのバイクには樹木が跨っていた。

「どうしたのそのバイク!」

輝は樹木に近づき問いかける。

「そういえばこれどうした?」

宏も知らないらしい。その代わりに、ジュモクドライバー……………ミ  
オが答えた。

「道で拾った!」

( …… )

「まあいいや。とにかくアイツ!」

チーターはさっきので結構ダメージを喰らっていた。

「変身!」

輝はクウガに変身してチーターを攻撃する。

「クヌギマグナム!」

樹木はゼンマイで武器を呼び出し、木製のマグナム銃でクウガの援  
護をする!

「タアツ！ハアツ！ダツ！おおりゃ！」

凄まじいラッシュの直後すぐ上段蹴りを食らわす。

「輝！ライダーキック行け！」

「OK！はあああああつ」

クウガが右足にパワーを貯める。

「ドリアアアア！……！」

助走をつけてチーターにマイティキックを食らわす。

「ぎゃあああああああつ！……！」

チーターは断末魔と共に爆発した。

「……いゝい！」

2人のライダーはハイタッチをしてそして変身を解いた。

「なかなかやるなあ。」

2人の戦いを物影から見ている少年がいた。

「だけどここのままじゃ彼らも持たない。俺も早く出ないと。」

そう言って少年はその場を去った。

彼の手には黒いカードデッキが握られていた。

次回の仮面ライダー空我は!!

転校生!?

僕はベタベタまとわりつくヤツは嫌いなんだ。

こいつは!???

嫌ああああつ

ガバツ

変身!

オイ、嘘だろ……………

次回、漆黒の転校生

青空を守るために戦え!!!

## 5話 大空へ羽ばたくマシン！（後書き）

意外と長くなりました。反省点は輝がいきなりバイクに乗れたという矛盾ですね。直す気はさらさらありません。  
ミオバイク拾うとかすげーなー。尊敬するよ。

最後に、少し重要なお知らせです。この小説でのコラボを募集しています！もしコラボしたいって人がいたら感想にお願いします！  
ではまた次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2914w/>

---

仮面ライダー空我 ~ 青空の勇者(ニューヒーロー)・青空の伝説(ニューレジェン

2011年10月30日03時14分発行